

第九回公演 司会原稿案（第二稿）

※司会が話す内容は、プログラム原稿とは違ったテイストで来場者に話題を提供していきます。登場する神楽師（役者と鳴り物）の感情、気持ち、こだわり、など、「感情表現」を用意しました。お客さんの目線（見方）がこの司会コメントで広がったら、と思っています。ドライな解説は、プログラム。司会のコメントは、役者の肉声、つまり感情、思い込みの様子を伝えていく方針です。どちらからといえば、演じ手寄りです。

寿三番叟の司会原稿案（第二稿）

三番叟を演じる垣澤良さんによると、三番叟は垣澤社中「お家芸」とのことです。まず、最初に覚えるべき舞だそうです。激しさや賑やかさの中に、常に「躍動感」を意識して踊ることを心がけているそうです。

五人囃子の踊りを演じる中山敏男さんは、つつい三番叟に目が行きがちな演目であることから、今回は五人囃子に「ソロパート」も加え、新しい「もどき」の世界を開拓してみた、とおっしゃってました。石渡勇さんは神楽の軸のひとつは喜劇。笑いですから、その辺りを意識されて。舞台に出る、と言われていました。

お囃子の演奏ですが、笛や太鼓を演奏する大貫恒文さんから伺ったところ、ただ単に賑やかなのではなく、地面を踏みしめて固め、稲を生やし、米が取れ、「収穫の喜び」をたくさん舞台上に振りまく祭のような情景描写を伝えたいと語っておられました。

それでは寿式三番叟の開演です。

八俣大蛇の司会原稿案（第二稿）

八俣大蛇（ヤマタノオロチ）で大蛇を演じる垣澤純子さんは、相模地方の神楽にあって、大蛇の演技の特徴は、蛇（へび）のように地面を這いずり、それも複数人で演舞することだ、とおっしゃいます。

今回は、相模の神楽の特徴を十分に生かしながら、「群れて舞う」という要素を意識して、新しい大蛇（オロチ）の演出に取り組んだそうです。また、今回は途中で垣澤純子さんがダンス的な演出も少し取り入れてらしいです。とっても楽しみです！

また、大蛇を退治するスサノオ役ですが、演じ手である神成さんは、ただ単に立役（タチヤク）を演じていくのではなく、乱暴狼藉であったスサノオが、クシイナダ姫を助けることで立派な青年へと変化し成長する、そのような過程が表現できるよう、心がけているとのことでした。

それから、囃子の皆さんですが、大蛇の場面では、おどろおどろしい暗闇と恐怖の世界から、スサノオの刃によって徐々に天空の空が切り開かれ光が差し込んでくるかのような戦場が浮かぶように、演奏されている、とのことでした。

天之磐扉の司会原稿案（第二稿）

天之磐扉で手力男命（たじから）を演じるのは垣澤社中の家元です。家元の「芸」の一つだと言われています。

相模の手力男の命はなんといっても岩戸を押し開く際の手の内と溜めがすべてだと家元はおっしゃっています。

じりじりと躡り出て来る「足の運び」が見せ所だと思います。それから、空気を押し開き、切り分けていく「手の動き」に注目してください。暗闇を切り開いていくような、雰囲気を感じて貰えば、と言われていました。

また、もう一人の主役はウズメノミコトです。踊りの名手とされています。この役を演じている垣澤瑞貴さんは、全身全霊で「祈りを込めて」いつも舞っているそうです。「祈り」が伝わらないと、いけないと言っていました。

今回は特にダイナミックで大きく激しい動きにお客様は注目してもらえればと、言われていました。それから神楽の衣裳にも垣澤瑞貴さんなりのこだわりを持って、演じるそうです。

最後に出てくる、アマテラスを演じる垣澤純子さんは、アマテラスは悲しみから岩戸へお隠れになったが、岩戸から出てくるときはスーッと胸をなでおろし、高天原の統治者と生きていく覚悟を決断した「そんな迷いのない気持ち」が表現できるよう、演じているそうです。

お囃子の皆さんですが情景描写がについて、「神の喜怒哀楽」を強調して演奏されている、と伺いました。「悲しみ」の出端は鎌倉という曲で、「楽しみ」の鈿女の舞は印場、「恐怖と期待」の手力男の舞は早、希望の天照の出は「れんぼ」という構成すると言われていました。

神前舞の司会原稿案（第二稿）

神前舞の囃子を演奏する西方陽一さんは、神前舞は、舞だけでなく、囃子も基本を軸にして一切崩すことはありません。と語っておられました。

他の神楽演目は臨機応変のところがあり、神楽師の個性が十分に発揮されますが、神前舞は、淡々と、演技します。西方さんは、しかし、それが返って神聖なものへと転化され、美しくなっていく、という信念で、舞っているそうです。

お囃子も一番演奏者の技量が問われるのが神前舞の演奏だとよく言われています。囃子を、ぜひ神経を研ぎすませて御拝聴ください。神の前で舞う、演奏するという神楽の本来の姿が見えてくると思います。

紅葉狩の司会原稿案（第二稿）

紅葉狩で侍女を演じる垣澤純子さんと加藤美津枝さんと臼井良子さんは、今回の舞台で初めて打掛を着用するそうです。

神楽の舞台で、打掛や引き振り袖を着用して演じるのは前代未聞の試みだそうです。裁き方をたくさん稽古なさったそうです。

どれだけ雅（みやび）な空気を作れるかが勝負。手元まで神経を貼り巡られて演じています。声色も歌舞伎調を意識して、ずいぶん勉強させていただいた、そうです。

維茂を演じる家元は、腕は立つが品の良い公家武将ですので、品格と強さを表現することを一番大事にしていると言います。今まで演じたことのない役柄なので、声を高めにしたり、口調も落ち着いた雰囲気を作る努力をしてきました。

囃子の演奏を担当する神成信之さんから聴きどころを伺いました。更科姫の変え面のところだと言われました。大宮と早という曲を使いわけの部分をもっとも見せ場、聴かせどころ、だそうです。「雅さの大宮」と、「闇の早」、この魅力を伝えられたらいい、そんな言葉がありました。

根の国試練司会原稿案（第二稿）

根国試練でオオナムチを演じる信太龍也さんとスセリ姫を演じる垣澤瑞貴さんは、演目を構想するにあたって、台本の段階からたくさんの時間を費やしてきたそうです。今までの里神楽の固定概念を打破するために、自分たちがこれまでの人生で習得してきたものを、すべて投入して再構築しました。

歌謡曲を取り入れ、ダンス要素を持ち込んだり、特に鼠の化身が登場するところは賛否両論あると思いますが、とにかく演者と一緒にお客様が楽しんでほしい、そのように皆さんが言われていました。

また、今回は本当の夫婦が夫婦役を、本当の父娘が親子役を演じるそうです。思わず想像してしまいますよね。社中神楽らしい、キャストイングだと思います。

寿獅子・大黒舞・両面踊り 司会原稿案（第二稿）

寿獅子で獅子を演じる信太龍也さんは、獅子は相模流には元々なかったものだとおっしゃいます。初めて主役で踊らせてもらった思い出のある役だそうで、今回はこの大きな舞台上、どれだけ獅子の躍動感を伝えられるかが勝負を意気込んでいらっしゃいました。獅子の名前はゴンちゃんとおっしゃるそうですので、ぜひ舞台上で「ゴンちゃん！」と大向こうを言ってください！とのことでした。

大黒舞を演じる塩川一美さんは、社中の番頭さんとして長いキャリアをもっていらっしゃいます。どんな時でもお客様が舞台を喜んでくれるように、面の下も笑顔で踊っている、とおっしゃいます。

両面を演じる垣澤謙治さんは、この舞台上で演じるために猛特訓をしてきたそうです。先にお話しできませんが、表と裏のギャップをどうやってわかりやすく伝えるか、芸歴が試されるとおっしゃいます。